

自主の旗

日教組和歌山

第200号
1994.3.22行
編集部発行
36-6820

全員配布

二〇〇号特集 (その二)



ない映画だと思わんですが、これは自分の考え方をつくった映画なんです。次は『二〇〇一年宇宙の旅』そして『フィールド・オブ・ドリームス』です。共通するのは、宇宙につながっている。空の宇宙ではなく、心が突抜けていく」というところですね。日本映画では『八月の濡れた砂』と『けんかエレジー』です。

個人的な映画の評価って、それを観た時の自分の生活や意識の状況に左右されますよね。私たちの同世代の者どうしが映画の話をすると、良くデ・シーカやフェリーニが出てくるのですが、それはその映画の価値が普遍的なものだからですか、それとも「世代」ですか。

山本「世代が大きいと思いますねえ。先生なんかはゴダールにはちよっと遠いでしょう。ぼくらはもっとそれ以降でアメリカニューシネマになりますねえ。もちろん時代を超えていける映画もありますよ。先程の『シンドラーのリスト』はその一つになり得ると思いますね」

不朽の名作云々という『戦艦ポチョムキン』を思い出しますが、あれはいかがですか。
山本「いやあ、ポチョムキンになると、もうお勉強している感じなんです。え。まさに教科書です」

さて今度は映画にみるお国から、民族性についてうかがいたいのですが。私は外国映画は外国映画としてしか認識していません。多いのですが、そう十把ひとからげに見てはいけないのですか。

山本「実はミニシアター系でかかる映画にはいろんな国のあるものがありますが、全国一斉上映のものはほとんどアメリカ映画なんです。『ピアノレッスン』はオーストラリアですけどね。アジアの映画になると、ジャッキーチェンなどを除いてはメジャ

ーで上映されたものは知りませんねえ」

まだまだ技法として不十分なんですか。

山本「以前は確かにそういう面はありましたが、中国の『紅いコリーヤン』や『菊豆』なんかはむしろアバンギャルド(前衛的)ですね。アジアの映画を好んで見ようとは思いませんが、外国映画イコールアメリカ映画という感覚に風穴をあけるために上映したいという思いがあります」



話を日本映画に向けますが、どうも私自身、日本映画を見て充足感を感じたことが少ないのですが、これは私の偏見ですか。

山本「いや、そんな声はよく聞きます。映画というのはお金をかけるとそれなりに厚みができるのですが、言葉の関係でアメリカ映画のように全世界を相手にできないハンディキャップがありますね。たしかにアイドルを使えば当たるとか、一本当たれば同じパターンでいこうなどという作り方があります。でも観客はそれを先入観でみすぎているような気がします。今、上映している『シユート』という映画はSMAFというアイドルを使っていますが、アイドル映画の定型をすべてくずした、さわやかな青春映画にできています。『となりのトトロ』も最初は一部アニメファン向きと思われて、封切の時は本当にお客さんは来なかったんです」

今後の日本映画の展望はいかがですか。新しい芽があるんですか。
山本「昨年『学校』と『高校教師』が同時封切で両方ヒットしたんですね。これは今の時代と可能性を表しているように思います。これが現代日本

なんですすねえ」

さて『月はどっちに出ている』についてうかがわないわけにはいきません。

山本「とにかく市井の人を扱った映画なんです。そこにはフィリピーナあり在日朝鮮人ありで「何だお前、朝鮮人……」「きちがい」などのセリフがいっぱい出てくるんです。そしてむしろ、そうすることで、逆にそれが突き抜けていくところがあるんです。4月9日から私も上映することに決まりました」

今、もしくは近日上映のものでお勤めは？それと観客のマナーについて一言。

山本「『シユート』ですね。『ラストソング』は終わりましたが、ビデオでは是非。タバコを館内で吸う人はたしかに減りました。かなり注意させてもらってききましたから」

今日は本当にどうもありがとうございました。

山本哲也氏 一九五五年生。御坊市出身。現在、築映興行株式会社営業部長。

約一時間のインタビューの一部を掲載しました。録音テープご要望の方、お申出下さい。

後記

「自主の旗」は病休、産休育休などで休んでいる組合員さんには自宅へ郵送しています。先日、病休中の方から「そうした心配りがうれしい。自分もついていた組合というもののイメージとはちがう。」と、ほめてもらいました。三〇〇号までまたこつこつとがんばります。そして、ひとりでも多くの仲間ができることを願っています。

